

第10回多摩川流域歴史セミナー

『多摩川下流域における信仰伝承』

講演：乾 賢太郎 氏
(大田区立郷土博物館)

－開催報告－



『多摩川50景』 六郷 多摩川緑地

令和2年11月29日（日）
多摩川流域懇談会

第10回多摩川流域歴史セミナー

講演『多摩川下流域における信仰伝承』

講演：乾 賢太郎 氏
(大田区立郷土博物館)

■はじめに

・日本民俗学とは

私は地域博物館の学芸員で日本民俗学を専門としていますので、この学問の説明から始めたいと思います。日本民俗学について平たく言うと、この学問は、「日本」において「生活文化」を「調査研究」することを指します。時代の世相や社会背景を考慮しながら生活文化の諸相を分析し、生活文化の変化・変遷、地域性を考えることが目的となっています。

研究対象には、主に非文字文化が挙げられます。例えば、身振り手振りや所作といった行為、方言や口頭伝承などの言葉、さらに物質（特に道具）の使用法やそれにまつわる伝承などが重要視されています。また、成立背景には、文献資料、要は文字資料のみを極端に重視する歴史学を批判した柳田國男によって文字に表れない歴史も明らかにすることを目的として始められたということがあります。

・多摩川をめぐる民俗

さて、川というものは人々の生活に必要不可欠なものでした。川に関わる民俗の事例として、飲み水や灌漑用水、筏流し・川船・橋・渡しなどの交通交易、川での漁、河川敷の植物の利用、さらに川での娯楽や遊びといったものまであり、川は人々の暮らしに深く関わる場所でした。しかし一方で、川は一度氾濫するとあらゆるものを破壊する自然の脅威でもありました。こういった恩恵を受けつつも畏れる対象として認識されていたのです。

・大田区における多摩川地区の特徴

『大田区史（資料編）民俗』には大田区の民俗事象がまとめられていますが、そこに区内の多摩川沿いの地域の特徴が書かれていますので、抜粋して紹介します。

まず、大正末期から昭和にかけては稲作・畑作・果樹栽培が盛んな場所だったこと。次に、筏・砂利採取・川漁など、多摩川を利用した職業の伝承が残るということ。そして年中行事、春には予祝儀礼、秋には収穫祭など、農作業と関連づけたサイクルの

中で行事が行われていたということ。最後に、対岸の川崎と民俗の類似性が見られることが記されています。

・本講座の目的

以上のことを踏まえて、本講座では人々が恩恵を受けつつ、畏敬の念を抱いた多摩川の信仰伝承について流域の住民の暮らしぶり、主に生業と関連づけながら解説します。具体的には多摩川下流域、大田区に展開する寺社や講集団の習俗を通して多摩川と人々とのつながりを振り返るというのが今回の目的です。

■沼部の庚申さま

・下沼部村

大田区沼部は昔、上と下に分かれていました。そのうちの下沼部について、江戸時代は世田谷領に属していました。地形の特徴としては、東側が台地、西側が低地であり、その低地部に六郷用水を利用して多くの水田が開けました。村の東西を貫くように中原街道があり、多摩川越しに武蔵国と相模国と分かれているため、武相の人々の往来がありました。

・桜坂

中原街道の名残として、「桜坂」があります。元は「沼部大坂」と言われており、坂が急勾配であったことから中原街道の難所の一つと言われました。



図1 桜坂

現在では、側道（赤色の矢印）と本線（黄色の矢印）がありますが、実は道の角度が異なっています。



側道側の急勾配がかつての中原街道の名残ということです。大正 12 年に改修工事が行われて、本線のように緩やかな勾配になりましたが、昔の人はこんなきつい坂の角度を上っていたことに思いを馳せることができます。桜坂の名前は、昭和 5 年に昭和天皇の即位記念として、地元の有志の人たちが坂の両側に桜を植樹したことから呼ばれるようになりました。

・丸子の渡し



図 2 丸子の渡し（『大田区の文化財第 19 集

写真でみる郷土のうつりかわり（風景編）』より）

昭和 9 年から昭和 10 年にかけて丸子橋が架かり、廃止するまで中原街道の重要な交通機関として機能したのが、丸子の渡しです。神奈川から東京への農作物の出荷や金肥の回収にもこの丸子の渡しが使われました。

・多摩川での砂利採掘

多摩川における砂利採掘は、江戸時代中期から始まっていました。明治時代になるとコンクリートの需要が高まって、地場産業としても非常に大きなものになりました。また、下沼部村においても砂利の採掘の積み送りが行われて、その作業に従事する人々がいました。多摩川下流の改修が大正 7 年（1918 年）から昭和 9 年（1934 年）にかけて行われていたころ、砂利の盗掘が盛んになったのです。

盗掘を繰り返すことで川の底が下がってしまい、海の水がどんどん川のほうに入ることがありました。田園調布の浅間神社のほうまでずっと海水が上がってきてしまったという話もあります。これにより昭和 9 年 2 月には砂利採掘禁止令が出されて、多摩川での砂利採掘というのは全面禁止となりました。



図 3 多摩川砂利の盗掘被害

（『多摩川砂利採掘取締に関する状況』より）

・密蔵院

この下沼部には密蔵院というお寺があります。真言宗智山派の寺院で、寺の言い伝えによると、慶長末期に火災で本堂を失ったものの、当時の有力檀徒の森庄兵衛が本堂を再建していることから、「^{しんりゅうじ}森立寺」という寺号がついています。新田義興が滞在した陣屋跡とも言われており、江戸遠江守が義興の怨念による雷から逃れる加護を受けた「^{らいどめ}雷止観音」を祀ったことでも知られています。

明治時代になると、31 世の住職の^{じょうきん}定欣が寺内外の整備を行い、沼部の庚申さま復活に導きます。また、^{じょうきん}定欣は明治 36 年に「^{しょうめん}大青面金剛明王垂化記」という青面金剛、いわゆる庚申さまにまつわる謂れが書かれている本の記録を行いました。つまり、当時において庚申さまに関する縁起がまとめられていたのです。32 世の^{じょううん}定伴もまた、沼部の庚申さまの繁栄に尽力した人物で、本堂の改修・増改築を行っていました。

・沼部の庚申さま

庚申さまの本尊は庚申堂、現在の金剛尊院に保管していたのですが、安政 2 年（1855 年）10 月の大地震、あるいは安政 3 年（1856 年）の暴風雨でお堂が倒壊してしまったものの、長持に入っていたので助かったということが伝わっています。



図 4 修復前の青面金剛像（『大田区の文化財
第 33 集 大田区の美術工芸』より）

明治時代になると平間（現在の川崎市中原区）に暮らす男の人が、多摩川の砂利掘りに来て眼を患ってしまいました。砂利を採取すると、砂ぼこりなどで眼を病む人は多かったようです。患ったところ、沼部の庚申さまの前で治るように願かけをしました。すると、ある夜、夢枕にこの青面金剛が立って、青面金剛が衆生救済のために世に出たいということを訴えたそうです。その知らせを聞いた男は、長持に入っていたお像を取り出して本堂に安置したところ、たちまち眼の病気が治ったということが伝わっています。これが密蔵院に伝わる伝承であり、これを発端として青面金剛の信仰というのは非常に盛んになりました。地元以外にも日本橋、新橋、日暮里、田端、川崎、横浜などから参詣者が集まったのです。

大正 12 年 9 月の関東大震災や昭和 20 年 5 月の太平洋戦争の空襲で庫裏や仏具などが焼失したものの、庚申さまは別置されていたので助かりました。震災や戦争による被害によって、これを支えてきた信仰者、参詣者、講中という人々の集まりは四散してしまいました。

・ 流行の背景

生業と信仰の関係でいきますと、沼部の庚申さまの信仰が広まっていく背景には、砂利採掘の従事者の話が関係していました。その男の眼病平癒の御利益が周辺部にどんどん拡大していったわけです。また、広める要素として非常に大きかったと言われるのが中原街道の存在です。東海道の脇往還として、

砂利も含む物資の往来というものもありました。川崎側も大田区側も渡し場がありまして、その渡し場の近くには非常にたくさんのお店が立ち並んで、人の往来とか渡船場が繁栄していました。そういった賑わいも流行の一つを担ったと考えられます。

最後に住職の尽力もあります。ただ信仰が広まるだけではなくて、迎え入れる側も準備をしておかなければならないということで、例えば 31 世、32 世の住職は寺院の整備、境内の整備を行いました。さらに、31 世の定欣は、縁起を再編するために過去の由来書きを筆写して、それを自分たちのお寺の語りとして用いたことが考えられます。そういった当時の住職たちの尽力というものも、信仰を支えた要素と言えます。

■海苔養殖と代参講

・ 海苔の生育環境

続いて、海苔養殖と代参講についてお話していきたいと思います。多摩川の河口部で東京湾に面した地域は海苔養殖が盛んな場所でした。海苔づくりの生育環境に適している要素は 3 つ挙げられます。1 つは遠浅の海であること。東京湾は干潟が多い場所でした。次に、適度な潮の干満があること。3 つ目は海水と淡水が混ざり合う場所、汽水域であること。特に大田区や川崎市の場合は、多摩川の流入が近く、豊富な栄養の供給を受けることができ、潮の流れも緩やかなので、良質の海苔が採れたとのことでした。

・ 海苔養殖の本格化

海苔養殖が本格化するのは江戸時代中頃の享保年間と言われています。江戸幕府が品川・大森の地先海面で生産される海苔に対して、営業税である「運上」を割り当てるのが延享 3 年のことです。元は食用ではなく、肥料用に海藻採取を行っていました。それとは別に海苔の生産のために「海苔運上」と言う税金が新設されたということは、地域の産業として成長したことが背景にあるからです。

・ 江戸時代の海苔養殖関係村

江戸時代において海苔養殖ができた地域は限られ



ていました。幕府に許可されたのは、品川宿の海晏寺^{かいあんじ}門前、品川寺門前、南品川宿、品川獵師町、大井村。

大田区域では、不入斗村、大森村、糍谷村に限られていました。品川・大森沿岸で採れた海苔は乾し海苔にされ、將軍家やその菩提寺の寛永寺、徳川御三家にも納められて、御膳海苔と呼ばれた非常に質がよくて格の高いものでした。

海水温が非常に冷たくない、良い海苔が育たないことから、品川・大森海岸で冬期の海辺の副業として開始されました。羽田・羽田獵師町も天明4年（1784年）から海苔養殖ができるように幕府に何回も願い出ました。しかし、海苔養殖に従事した村々は、自分たちの既に持っている漁場の水質の悪化、ヒビ材の奪い合い、販路の混乱などを懸念して、羽田の参入を反対しました。加えて、羽田は、御菜浦^{おさいうら}と言う幕府の食膳用の魚の供給地であり、羽田の獵師町は幕府に納めるための魚を取る地域として認められていたため、既に幕府から海苔づくり以外の特権を与えられていました。そういう地域が海苔養殖にも参入してくることはいかなものかということで、ほかの村々から反対を受けていたのです。

・明治時代の新規参入

明治3年になると羽田村、羽田獵師町、鈴木新田、大師河原村、生麦村などの沿岸の村々も、漁場を得て海苔を採取することが明治政府から許可されました。新規参入が可能になったのは、大森が実は慣例を破ってしまったことが関係しています。

明治元年（1868年）に官軍が東京に進出した際に、大森村が5万両を官軍に献金し、その代償として2万7500坪の漁場（後に官軍場と呼ばれる）を獲得しました。羽田沖のあたりに官軍場という大きな海苔の漁場がつくられましたが、実は新規の海苔の漁場をつくってはいけないという習わしがありました。海苔の生産量で筆頭である大森がその慣例を破ってしまったので、海苔養殖の新規参入も認めざるを得なくなったということで、羽田や川崎の方面も海苔の生産が許可されるようになったのです。

・戦前の最盛期から戦後の終焉へ

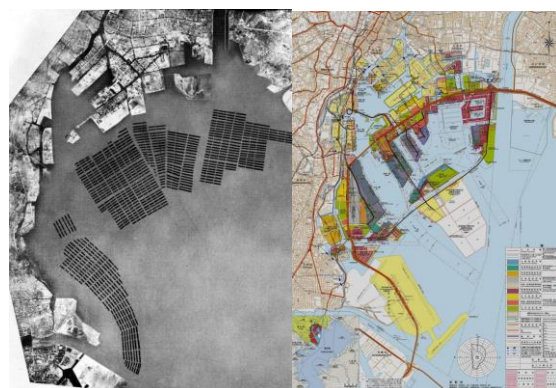


図5 昭和35年当時の東京湾（『東京都内湾漁業興亡史』より）と平成28年の東京港湾図

左側の昭和35年2月の撮影の写真は、黒く塗られているのが海苔の漁場を示します。右は平成28年の東京湾で、同じ場所は埋め立てられています。戦前から港湾整備などが進められ、昭和30年代になると漁場の環境悪化が否めなくなりました。戦前から第二次世界大戦までの東京は、海苔の生産収益が他県を圧倒する場所でした。しかし、東京港の整備計画が再び浮上し、ついに昭和37年（1962年）12月3日、漁業権放棄の協定書に調印して、海苔養殖の幕を下ろすことになりました。

・代参講

ここでは、「海苔養殖と代参講」でお話をしたいと思いますが、この代参講とは何でしょうか。まず、講集団というのは、ある目的を達成するために集まることが一つの指標となった集団のことを言います。その一つに信仰を目的とした集まりがあり、その信仰の対象が地域の内か外かということで名前が変わってきます。地域の内の場合は在地講とか村内講、外にある場合は参拝講とか参詣講と呼ばれました。特に参拝講や参詣講が江戸時代の後期から活発となったのは、地回り経済で農村部も豊かになってきたことで外に出られる余裕が出てきたと考えられます。そういったことから、著名な霊山や社寺への参詣が盛んになっていきました。大田区内には、東京都青梅市にある武州御獄山に参詣する武州御獄講、八王子市の高尾山に参詣する高尾講、神奈川県伊勢



原市にある大山に参詣する大山講、千葉県成田市の成田山新勝寺に参詣する成田講など、たくさんありました。

昔は、地域の人々全員で行ける余裕はなかったため、代表者がみんなの代わりに、代表して行くということが一般的でした。これを代参講と言いましたが、大田区にも見られました。

・大森の大山講

まず、海苔づくりで盛んだった大森の大山講についてですが、伊勢原市の大山は別名「阿夫利山」（雨降山）と言われ、関東では雨乞い山として非常に有名な山でした。江戸時代中期以降は大山参りが流行し、大山御師（^{おし}霊山や神社、それを信仰する人々をつなげる宗教者）の指導によって関東や東海を中心に大山講が成立しました。



図 6 東京大森三講

大山阿夫利神社には、各地の講からの奉納物があり、境内にある石柱の中に大森の講の名前も見ることができます（写真より「東京大森三講」）。丸三講とは大正 14 年（1925）に、現在の大森西の海苔生産業者が中心となってつくられた大山講です。この講では、水難除けに御利益があるとして大山を信仰しました。海苔養殖が終わった後も、水難除けの御利益を授けてくれることへのお礼として参拝していたと言われています。

他にも、大田区大森東にある貴船神社には「阿夫利神社」と書かれた石碑が境内にあり、これは「東京大森海盛講」が昭和 3 年（1928 年）に建てた講碑です。



図 7 大山阿夫利神社 下社

・大師河原の武州御嶽講

次に紹介するのが大師河原です。川崎の事例にはありますが、大師河原の場合は武州御嶽講についてです。江戸時代中期以降に五穀豊穡の神として信仰されたのが、武州御嶽山です。武州御嶽山には大山と同じように御師と言われる宗教者がおり、彼らの布教によって関東一円に講が組織されていきました。武州御嶽山は山狗信仰の山として有名で、代参に行った人たちが山狗の描かれた護符をもらい受けて、火災除けや盗難除け、虫害除けのために用いたというのが特徴的です。

では、大師河原の武州御嶽講はどのようなものだったのでしょうか。ここで大師河原の中瀬の明治 32 年生まれの方による語りを紹介します。一つ目の語りは、「海苔の育つ時期には東京湾のきつい海水に多摩川の真水が流れ込んで塩加減がよいから、色が黒々とした、つやつやして軟らかい海苔が採れた。海苔の品質に影響する川の真水と海の塩水とが混じり合う濃度が最適な状態、いわゆる甘い水は多摩川の水量、雨によって左右された」。もう一つが、「普通の田畑の雨乞いでは、その地域に雨が降ってほしいものだが、海苔を作っている中瀬村にとっては多摩川の水量が欲しいのであって、この地域にはできたら雨は降ってほしくない」という内容です。大師河原の中瀬の人たちは、遠く離れた武州御嶽山で雨乞いをしましたが、海苔はある程度成長した際に雨が降ると腐ってしまうため、山のほうで雨が降ってくれることで、それが川を伝って甘い水になることを、願かけしたのです。このように大師河原には、



山からよい水が流れてくると、よい海苔ができるという伝承が残っており、山・川・海の3つが連動して考えられていたのです。川は山と海をつなぐ存在として意識されていたと言えます。

・河口部の代参講

事例は少ないのですが、河口部の代参講として大森と大師河原の事例を見ました。今回は海苔養殖との関連で解説しましたが、どちらの地域も自分たちで田畑を持って、あとは自家消費と田畑肥料としての漁業を許された農村、いわゆる磯付村でした。しかし、一方で大森は大山を水難除けの神、大師河原は武州御獄山を多摩川の水の神として崇めたわけです。この違いというのは、養殖にかけた歴史の長さがまず考えられます。江戸時代の中期ぐらいから、大森は積極的に海苔づくりが行うことができた一方、大師河原は明治の頭にならないと許可が下りなかったのです。半農半漁とは言いつつも、そのような生業にかかる比重の違いによって、信仰が広まり、どうやって定着していったのかという理由にも関わってくるのではないかと考えています。

■無縁仏の供養

・無縁仏

次に、無縁仏の供養ということで、ここでは祀り手のない霊のお話をしたいと思います。事例として挙げるのは、羽田、大森東、そして六郷という地域になります。墓地内にそういった祀り手のない霊を祀るところがありますが、大田区内の場合、墓地の外でも祀られている事例が幾つか確認できます。

・羽田の五十間鼻

その一つが羽田の五十間鼻という場所です。



図 8 羽田の五十間鼻

五十間鼻を撮った写真ですが、写真の奥には羽田空港が見えます。中央に見える石積みの沈床の長さは90メートルで、河口部にずっと長く敷き詰めています。これは洪水時に多摩川の濁流が現在の空港がある辺り、旧鈴木町に突き当たるのを防ぐための水制として働きました。ここで制御するということは、ここに水が寄ってくるということです。すなわち、川や海での水死者が水の流れて多く寄ってしまう。その関係で、昭和53年の護岸工事に伴い、このようなお堂が造られました。羽田の漁師は、五十間鼻に流れ着いた水死体を非常に丁寧に扱いました。羽田の念仏講（念仏をする集まり）の人たちが供養して、身元不明者は羽田にある正蔵院の無縁墓地に埋葬したということです。漁師たちの伝承の一つに、身の回りの異常な出来事をこの無縁様の祟りと結びつけるものがあり、そのために供養を行ったと言われています。

・大森東の海難供養塔

もう一つ、これは多摩川ではありませんが、内川という川が大田区内に流れています。北馬込付近を源流として大森東の平和島運河に注ぎ込む川で、この場所も潮流の関係で水死者が流れ着くことが多かったようです。かつては引き取り手のないものを海岸近くに埋めて供養していたので、築山になりました。



図 9 大森東の海難供養塔

当地には海難供養塔が建てられており、かつては主に海岸方面で貝や海苔の採取に従事していた人々で構成されていた三原講や日蓮宗の大林寺の住職が船に乗って、海中に四角い塔婆を立てて無縁仏を供養



したということです。現在でも、供養塔の周辺の方々に構成される三原講によって維持されています。毎年、盆と彼岸には大林寺の住職を呼んで、ここで供養を続けています。

・六郷の川施餓鬼

最後は六郷の川施餓鬼です。昭和初期まで、六郷では8月初旬に無縁仏の供養を行っていました。日蓮宗寺院の合同の行事で、多摩川の水難者、無縁仏を慰霊するものでした。長さ10間（18メートル）、幅3間（5メートル）の川船を2艘つなぎ、船の上には太鼓や施餓鬼棚などを上げ、10名ほどの僧侶を乗せて川施餓鬼を行ったということです。



図 10 六郷の川施餓鬼（『大田区の文化財第20集 写真でみる郷土のうつりかわり（風俗編）』より）
六郷には筏、木材の運搬に従事した人、砂利の採掘で砂利船を立てた人が多く、その中には川で亡くなった人もいます。そのため、この川施餓鬼が行われていました。

・供養の特徴

これらの供養の特徴をまとめて考えると、まず地形との関連です。河川上や河口部、そういった潮流の関係で亡くなった方々が集まってくる場所、そこに供養の碑を建てるということです。次に、無縁仏を祭祀する人は川や海などで生業を行う方が多かったということです。祀る人は、生業の安定を供養の実施と関連づけることがあります。また、海や河川での生業で生計を立てている人が亡くなったことから、その関係者が供養するということもありました。最後にエビス信仰の影響ということも挙げられます。これは全国の漁業従事者によく見られることですが、海で亡くなった方や大きな海洋生物が打ち上げられ

たということは大漁の兆しだと考える風習があり、これをエビス信仰といいます。羽田や大森の事例は供養という形をとっていますが、水死体を丁重に祀ることで、豊漁をもたらす神としても考えられていたのかもしれませんが。全国の事例の中でも類似するものなので、可能性を指摘しました。

■穴守稻荷神社の変遷

・玉川弁財天

最後に穴守稻荷神社の変遷についてです。鈴木新田にできたのが穴守稻荷神社ですが、神社ができる以前は玉川弁財天の方が有名でした。奥多摩の日原にあったとされる弘法大師の草庵の霊水から宝珠が湧き出し、それが多摩川に流れ出て、たどり着いたのが羽田のあたりだと言われています。宝珠は光を発して、羽田の人々は同地にある龍王院の境内に上の宮を造って安置したと言われています。かつては要島（多摩川河口にできた低湿地）でも祀られ、そこは下の宮と呼ばれました。江戸時代の下宮は風光明媚な場所として知られており、参詣者も多かったと言います。



図 11 「江戸近郊八景之内 羽根田落雁」
（大田区立郷土博物館所蔵）

歌川広重の浮世絵「江戸近郊八景」にも描かれるような景勝地でしたが、戦後は羽田6丁目の現地に遷座しました。

・鈴木新田

鈴木新田を開発したのは鈴木弥五右衛門です。天明期（1781年～1789年）に羽田村の名主の石井四郎右衛門から要島を譲り受けて開墾を始め、文化12年に新田として形態を整えたと伝わります。その後、



新田に入ってきた農民らもこの地に住みついて、鈴木新田として獵師町から独立したということです。

・伝承

穴守稲荷の由来に関連して、文政年間（1818年～30年）の間に鈴木新田の開墾中に堤が決壊するほどの暴風雨があり、その復旧に際しては堤に稲荷の祠を祀ったという伝承があります。すると、開墾も順調に進んで豊作になったということです。他にも、開墾者が開墾地の周囲に築いた堤に五穀豊穡を願って稲荷の社を祀ったことで、その御利益の影響か大津波が来ても新田は無事に守られたという謂れもあります。

・流行神から神社へ

明治18年9月の公称願という東京都や政府に宛てた文書の中には、次のことが記されています。まず、文政年間以降に村民が豊作大漁を祈ってきた神社が稲荷神社であること。2つ目に、明治17年9月の暴風雨によって社殿が倒壊したこと。3つ目に、前年の秋から不漁が続いたため、参拝者が増加したこと。それらを理由に社殿の建立を願い出ています。その後、明治19年12月には穴守稲荷神社と改称し、翌20年3月には遷座式を行ったということです。

・行楽地としての要素



図 12 「武蔵国荏原郡羽田穴守神社全図」
(大田区立郷土博物館所蔵)

神社だけではなく、多くの店も開業し、穴守稲荷の周辺は行楽地として非常ににぎわった場所でした。まず、料亭や芸者屋などがありました。海が近いので潮干狩りや海水浴の観光客でもにぎわいました。

また、神社裏手には羽田競馬場、さらに明治45年のストックホルムオリンピックのマラソン選考会が行われた羽田運動場もありました。このように、行楽地としての要素が同時に開発され、町が繁栄していったのです。

・川崎大師との関係

また、対岸にある川崎大師との関係も見逃せません。川崎大師と穴守稲荷神社は多摩川の渡しによって結ばれていたのですが、明治32年（1899年）には大師電気鉄道が大師線を開通させました。大師駅前から門前にかけて店が建ち並び、その後、路線は大森へ延伸されて、東京からの移動が便利になりました。また、明治35年（1902年）には穴守稲荷駅が開業しました。後の京浜急行は、川崎大師や穴守稲荷の参詣者・行楽者の増加をねらって開発したものと言えます。この結果、近代の多摩川の河口域は信仰と遊興の地として発展し、これに関連する生業も地域振興の一翼を担いました。



図 13 京浜電鉄のパフレット
(大田区立郷土博物館所蔵)

京浜電鉄のパフレットでも、川崎大師と共に穴守稲荷神社を宣伝し、セットで詣でよう働きかけていました。鉄道会社は沿線の住宅地を開発し、通勤通学などで定期的に収入を得る方法（定期路線）とは別に、不定期路線といって観光地を新しく開発する場合や、既存の寺社仏閣を使って観光ルートを作って、不定期収入を得ようとすることもあります。その中に組み込まれていくことで、参詣者がさらに増えていったことも考えられます。



・移転

終戦後の昭和20年9月当時は鈴木新田の中に穴守町、鈴木町、江戸見町という旧三町がありましたが、占領軍が町の人々に対して強制退去命令を出しました。そのため、人々は住み慣れた土地からが出て行くこととなり、穴守稲荷神社も一度は羽田にある羽田神社に移りましたが、昭和23年には羽田5丁目の現地へまた移って今に至ります。

・生業と信仰から見る穴守稲荷神社

生業と信仰から見る穴守稲荷神社ということで簡単にまとめると、まずは、新田開発の際に五穀豊穡を願って祀られた神が多くはやりがみの参詣者を集めるほどの流行神になったと言えます。その後は公称願の提出などを経て、社殿を築きました。それと同時に、参詣者を迎え入れる店や彼らが楽しむ設備など新規の産業という新しい生業も始められました。神社の繁栄を通じて新たな雇用が生まれたことも興味深い事例だと思います。それに加えて、非常に近代的だと思うのが企業、この場合では鉄道会社の参入です。そういった企業の登場も信仰の波及に貢献してきたと言えます。

■おわりに-多摩川の信仰伝承とは-

いろいろとお話ししてきましたが、もう一回本講座の目的を振り返ると、多摩川の信仰伝承と流域の暮らしぶり、主に生業と関連づけながら解説してきました。

1つは「沼部の庚申さま」、地域の地場産業、街道のにぎわい、どちらも多摩川の砂利、渡しの問題、関係していました。そういったものに根差した流行仏の誕生、背景には住職の尽力がありました。

次に、「海苔養殖と代参講」ですが、海苔養殖の条件に多摩川の存在は欠かせませんでした。河口部での海苔生産者の代参講が大森と川崎では信仰の内容が異なるという事例も見ることができました。

3つ目に、「無縁仏の供養」についてでしたが、川で見られた物故者の供養は生業の安定を図るためというように生業と関連づけられると言えます。

最後に「穴守稲荷神社の変遷」では、土地の神から流行神へと変化した穴守稲荷神社の歩みを確認しました。信仰の拡大は新たな生業を生み出し、鉄道会社とも連携しながら参詣客を誘致しました。

以上が私の講演となりますが、今までの講座とはまた違った視点を幾つか提示できたのではないかと考えています。ご清聴いただき、ありがとうございました。

○神谷コーディネーター

いつもですと会場からの質問カードを集めて皆さんのいろいろな質問にコメンテーターからコメントをいただくという形で進めてきました。今回は特殊な形になりましたが、質問者とコメンテーターを併せて小野館長さんをお願いしたいと思います。

○小野コメンテーター

この多摩川流域歴史セミナーも、回を重ねてまいりまして古代から中世、近世へと移っていく中で、どうしても民俗学からの視点というのが欲しかったんですね。多摩川の歴史・文化を考えていく上で、文献に頼る歴史だけではどうしても限界があるということで、非常に適任の乾さんに来ていただきまして、今日は、期待どおりというか期待以上の大変面白い話を聞かせてもらいました。ありがとうございました。

こうした中で、下流域の4つにスポットを当てまして具体的なお話をいただきながら、多摩川の流域の生活文化の特徴というのですか、流域ではないほかの地域と比べた文化の特色、さらに下流域特有の特徴というのも明らかになったのではないかなというふうに思います。

4つの事例というのは、1つ目は庚申さまの御信仰に関することなのですが、これが多摩川の砂利採取に関わる一職人さんから広まったというのは、全く初めて聞いたお話で非常に面白い事例でした。それがきっかけとなり、また中原街道のこともありまして一気に広まったということなのですが、これを楽しんだというのは、いってみれば眼を痛めるのは砂利採取、職業に関することだというふうなお話もありました。庚申さまの信仰を楽しんだのはこういった職人さんたちの共有のものだったのか、そうではなくて、それ以降は一般に広まっていったのか、その辺のことが分かれば教えていただきたいというふうにも思いました。

2つ目は海苔養殖に関わる信仰ということなのですが、私も迂闊で、海苔の養殖が多摩川とこれは

ど密接に関係しているということは初めて知った次第です。その海苔養殖に関わる人の代参講としまして御獄と大山があったということも伺いました。非常に地域的に特色のあることだというふうに思いました。

3つ目の無縁仏の供養のことです。この無縁仏というのは、上流から流れてくるものなのか、あるいは東京湾の海上から来るのか、あるいはその両方なのか、その辺のことも教えてもらいたいです。これは何となく仏様が上流から流れてくる、海からやってくるというようなことと共鳴しておりまして、川に対する異界感・他界感、そんなことをイメージさせることにも思いを馳せることができますね。

4つ目、河口部の新田開発に関わって開発地を整備する、その中で地域連携、対岸の川崎大師や鉄道会社とも連携をしながら相乗効果をねらっていくということでした。まさに現代風の相乗効果をねらった連携と観光地化による地域振興、雇用促進というようなストーリーが明確にうかがえて、大変興味深かったというふうに思います。こうしたことを通じまして、多摩川の流域の歴史文化ということに一つずつ迫っていけるのではないかなと思いました。

○乾コメンテーター

1つ目、沼部の庚申さまのところで、もともとは砂利採取に携わった従事者が眼を病んだところから始まったということをご説明しました。それ以降は砂利採取の人たちが担ったのか、それとも一般の人たちだったのかというご質問に対しては、お寺に残っている奉納物などを見る限り、必ずしも砂利採取の人たちが中心だとは言えません。どちらかというところから一般に流布して、その周辺の参詣者が集まったと考えたほうが妥当かと思っています。

あと、無縁仏の供養で、物故者の方が上流からか下流からかということなのですが、羽田の五十間鼻であれば多摩川の上流からという話なので、そうすると多摩川の上流、中流から流れてきて、そ



ここにどまったのかと言えます。しかし、海の流れも関係しますので、海からも寄せて来てどまったのかもしれない。

ただ、物故者の問題とは異なるのですけれども、小野館長がおっしゃった川における異界・他界の問題について、よく多摩川流域には漂着神、漂着仏を祀っているという伝承があります。河口部の特徴としては、上流から流れ着いたもしくは海から現れた神仏を祭祀するケースが見られます。有名なところで言うと、川崎大師の大師像、大田区鵜の木にある光明寺の善導大師像が挙げられます。今おっしゃった異界・他界と川の流れに関しては、そういった事例も挙げられると思います。

○小野コメンテーター

庚申さまについては、一職人さんがきっかけになったにすぎないのかもしれませんが、もし職業病として眼を病むような方が多くいらっしゃったとすれば、周辺にも——普通、眼というと薬師信仰になるかと思うのですが、そういった信仰を集めた事例があったのかもわからない。そんなことにこれから気をつけていきたいというふうに思いました。

砂ぼこり等のことを考えますと、もう一つ思い当たることがあります。咳のような症状なども引き起こすことがないのかなと思ひまして、ちょっと思い当たったことがあります。乾さんの古巣の多摩市、咳の神様が多摩川のすぐ脇にあるではないですか。あのあたりも多摩川の砂利採取が盛んに行われていたところなので、これは思いつきでして、今まで全く視点にはなかったのですが、ひょっとしたら、近代以降の産業の中でそういった信仰が流域に広まったという事例が今後拾えるのではないかなというふうに思ったところです。

2つ目の漂着神の問題は非常に興味深いところがあります。浅草の観音様、あれは海からでしたか、確かに上流から流れてくるというものなのですが、たしか多摩川では、世田谷の野毛にある六所神社の祭神は府中の六所宮（大國魂神社）のほう

から流れてきたものを祀り直して、名前も六所神社にしたといういわれがあったかと思うのです。同じ六所神社が大田区の下丸子にあったかと思いますが、あのあたりも、もし同じような伝承があるようでしたら興味深いと思うのです。ついでに言えば、狛江の和泉というところにも六所神社があるので、どうも府中よりも下流の多摩川の左岸に六所神社は分布していてちょっと気になっていました。

○神谷コーディネーター

ここから少し六所宮つながりで新しい話が出てきそうで、面白くなりそうですね。

海苔養殖と代参講の話、特に大山講、阿夫利山と御獄については山と海と川のつながりというお話では、本当に川というものが大事であったということでした。多摩川にもこういういいお話があると聞いてとてもうれしかったのですけれども、これは乾さんの発見なのですか、有名な話なのですか。

○乾コメンテーター

これは私が発見したものではなくて、もう既に川崎市が調査したもので、川崎市民俗文化財緊急調査団編『大師河原の民俗』に細かく記述されていました。今回の講演に当たって、非常に貴重な事例かなと思ったので取り上げました。

○神谷コーディネーター

御獄山の話、多摩川の水の神というふうにコメントに書かれていますけれども、山の神と水の神というのはイコールと考えていいのですか。

○乾コメンテーター

一般的には山の神と水の神はちょっと異なると思います。今回挙げた川崎市の御獄講の事例では、地域の人々は山の神が水の恵みをもたらす存在であったと捉えていたことが考えられます。

○小野コメンテーター

神谷さんは山の神と水の神の関係はということをおっしゃっていましたが、よく民俗儀礼で浜下り神事というのがありますよね。山の神様を海から迎えて、川を遡っていくという。山の神を祀るのに、浜



に出ていって海から神様を呼び寄せてお迎えするという伝統的儀礼が関東から東北にかけて、主に三陸海岸のほうにあったかと思います。そういった浜下り神事の事を考えると、山の神、水の神というのは共通性があるのではないかなと。

○神谷コーディネーター

私も乾さんの話を伺っていて山ほめ祭のことを思っていて、そういうことでもあるのかなと思ったのですが、乾さん、何かありますか。

○乾コメンテーター

山の神の話で思い出しましたが、山の神にはいろいろな性格があります。山岳信仰における山の役割としては、^{みくまり}水配としての性格が非常に強くて、山を水源として水と関連づけるというのは、農業との関わりの上で広く聞かれます。

今回、川崎市の御嶽講の事例を知ったときに、海苔の養殖をしながらも農業的な印象も一方で受けました。これはそもそも農業をやっていた土壌の上に海苔の養殖というものが後で追加されてそうなのか、あるいは川崎の多摩川沿いの農家からの影響があったのかなど、いろいろと考慮する必要がありますが、今回の事例を見つけたときにこのような山と水の関係についても考えました。

○神谷コーディネーター

今の水配神という話で言うと、金鑽(かなさな)神社なんていうのは完全にそういう位置づけですよ。農業のための水だと思うのですが、今日聞いていて面白かったのは、御嶽神社の水配神だとすると、役割が甘い水というふうにおっしゃっていた海苔の養殖との関係。そういう意味で、ただの農業だけではなくて、府中のくらやみ祭が品川の汐汲みから始まるというようなことも含めて、もうちょっと多摩川の上下流、いろいろなつながりがあるのかななどと余計なことまで思ったのですが、小野さん、その辺はいかがでしょう。

○小野コメンテーター

多摩川を通じて御嶽から河口部とつながっている

というのは講演の中でよく分かったのですが、ちょっと見方を変えれば、海苔養殖で、水の神だからといって水源に水を降らしてたくさん水を流してほしいというのはどうしてもこじつけのような感じもあります。本来農業神であったものに対して、海苔養殖の人たちを講に巻き込むための御師の人たちによる戦略だった——ちょっと失礼な言い方もしますが、そんな匂いもさせるようなことがあります。どうも本来海岸にいる半農半漁の海苔養殖の方々が自然発生的に御嶽なり大山を信仰するようには思えないんですよ。というのは、本来山岳信仰というのは、眺めて、そこに畏敬の念を感じて信仰に及ぶということだと思います。ただ、大森のあたりから大山は見えるのかな、多摩川台のさっき話のあった浅間神社からは大山がよく見えたかと思ったとき、あの海岸部から大山はよく見えないと思うのですよ。

先ほど乾さんが紹介された海苔養殖のひびの様子を描いた錦絵がありました。あの絵の奥のほうに象徴的に筑波山が描かれているんですよ。あれを見まして、もし自然発生的に山を敬うようになるとすれば、大山ではなくて筑波だと思えますよ。河口部の人たちの大山・御嶽信仰というのは自然発生的ではなくて、御師の側、山の側の戦略的なものの結実した形態かななどというふうにも思いました。その辺、乾さんいかがでしょうか。

○神谷コーディネーター

乾さん、河口から富士山とか大山とか見えるような気もするけど、その辺も含めて、御嶽講とか大山講って改めて何なのですか。

○乾コメンテーター

必ずしも見える、見えないというのは結びつかないところも実はあって、小野館長がおっしゃったように、御師と言われる宗教者の働きかけは、布教によるところというのは非常に大きいです。東京ではありませんが、千葉県には出羽三山に行く講がありますが、千葉から出羽三山は見えないですよ。で



も、それには宗教者の人たちが成人儀礼、死者供養と絡めて千葉の人たちを出羽まで引っ張ってきたというような経緯もあるので、御師の働きかけ、あとは地域の人たちが信仰をもたらしたことによって、講集団が成立したと考える方が自然だという気はします。

○神谷コーディネーター

それでは、乾さん、小野さんから最後に一言お願いしたいのですが、いかがでしょうか。

○乾コメンテーター

調べているうちに、対岸の交流や上流・下流の交流だけではなくて、山・川・海というエリアを一体的に捉えないと多摩川について中々分からないところがあるのではないかなと考えました。多摩川の問題というと、川だけを注目しがちですが、山や海の恵み・恐れ、そして人々との共存などを複合的、かつ一体的に見ていくことで、今までとは違った多摩川観というものが提示できるのではないかと思います。

○小野コメンテーター

多摩川流域歴史セミナーという名称からもまとめとして、最終的には、多摩川の流域の文化とは何かといった流域に対する定義というのはなかなか難しいかと思うのですが、例えば、地形的には沖積低地を指すとか、歴史的には用水だとか開発河口地のエリアを指すとか、そして民俗学的な世界では、川を媒介にした生活文化を共有する人たちのエリアというふうに考えていくことができるのかなと、今日のお話を伺っていて思ったところです。その共有する流域のエリアには、今日初めて知ったのですが、山の問題、海の問題、もうちょっと広い視野で流域の問題を含めて考えていくのがいいのだらうというふうに思ったところです。

○神谷コーディネーター

ありがとうございます。それでは短い時間で恐縮でしたが、以上で終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

乾 賢太郎 氏 プロフィール



大田区立郷土博物館 学芸員

専門：日本民俗学

役職：日本山岳修験学会評議員、日本民俗学会評議員

受賞歴：日本山岳修験学会奨励賞（H29.10）

近年の論文：

- ・「嶺の御嶽山とその信仰者たち」大田区立郷土博物館編『嶺の御嶽山と一山行者』（R1.10）
- ・「明治期における御嶽講社-豊穂講社（教会）を事例として-」
武蔵御嶽神社及び御師家古文書学術調査団編『武州御嶽山の史的研究』岩田書院（H30.3）
- ・「高尾山と鉄道開発」日本山岳修験学会編『山岳修験 第58号』（H28.9） など

【講演者挨拶】

多摩川を考える上で、今回どのような切り口でやったら関心を持っていただき、自分の伝えたいことが伝えられるかというのでいろいろと検討しましたが、対岸や上流・下流の交流だけではなく、山・川・海を一体的に捉えないとなかなか分らないところがあるのではないかと考えました。多摩川の問題というと、川だけを注目しがちですが、山や海の恵み・恐れ、人々との共存などを複合的、かつ一体的に見ていくことで、今までとは違った多摩川観というものが提示できるのではないかなと思いました。

開会挨拶：神谷 博 氏（多摩川流域懇談会運営委員長）



今回は多摩川流域歴史セミナー第10回ということで、記念すべき第10回、歴史セミナーシリーズの最後を飾る回です。会場でできないのはとても残念ではありますが、これまで1回、2回、3回は古代、4回から7回は中世・近世、8、9、10回は近世についてと、ずっと回を重ねてきたわけです。その間、古代のまとめ、中世・近世のまとめのシンポジウムも行いました。今回、この第10回が終わりましたら、その後、全体のまとめの多摩川歴史シンポジウムを開催予定です。そんなことで、今日はその最後を飾る回ということになります。第1回が大田区から始まりまして、最後の第10回も大田区で締めるということになりまして、大田区の郷土博物館学芸員の乾さんからの話を伺うということになっております。

まとめ：小野 一之 氏（府中市郷土の森博物館 館長）



多摩川の流域の文化とは何かといった流域に対する定義というのはなかなか難しいかと思うのですが、例えば、地形的には沖積低地を指すとか、歴史的には用水だとか開発河口地のエリアを指すとか、そして民俗学的な世界では、川を媒介にした生活文化を共有する人たちのエリアというふうに考えていくことができるのかなと、今日のお話を伺っていて思ったところです。その共有する流域のエリアの中には、今日初めて知ったんですけど、山の問題、海の問題、もうちょっと広い視野で流域の問題を考えていくのがいいのだろうというふうに思いました。

閉会挨拶：竹田 正彦 氏（国土交通省京浜河川事務所 所長）



本日は、第10回多摩川流域歴史セミナーにご参加、ご聴講いただきまして、誠にありがとうございました。乾様、小野館長をお迎えして、貴重なお話を聞かせていただくことができました。多摩川が地域の生活に深く関わり、その歴史を知ることで現在の多摩川をより深く知ることができました。さらにセミナーは今回で10回を数え、振り返ってみることで多摩川がより鮮明に見えるものと思います。今回は新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、皆さまをお迎えして開催できなかったことを残念に思います。セミナーはWebでの配信となりますが、誰でも好きな時に何度でも観られるそのように前向きに考えていただければ幸いです。

『多摩川流域歴史セミナー』

「多摩川流域歴史セミナー」は多摩川と人間の関わりの歴史を掘り起こし、「多摩川らしさ」としての地域文化を再発見することを目的として、先史・古代、中世、近世と年代を追いながら、多摩川流域の博物館、歴史館等を会場として、地域に即したテーマで随時公開セミナーを開催しています。

第10回多摩川流域歴史セミナー『多摩川下流域における信仰伝承』開催報告

作成 多摩川流域懇談会

- 多摩川流域懇談会は、多摩川にまつわる歴史文化を総合的に研究し、その成果をわかりやすく多摩川で活動する人が利用し、多摩川をより深く知ることができるよう、取組みの幅を広げ、活動を行っています。
- 多摩川流域歴史セミナーに関する情報は京浜河川事務所ホームページをご参照ください。

URL: http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin_index116.html

